

## 地域住民との協働による実践とその今後の展開に向けて - 滋賀県甲賀市・宇田郷土史会の事例から -

著者	佐野 正晴
雑誌名	九州保健福祉大学博物館学年報
巻	10
ページ	1-11
発行年	2021-03-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1147/00001446/">http://id.nii.ac.jp/1147/00001446/</a>

---

## 地域住民との協働による実践とその今後の展開に向けて

- 滋賀県甲賀市・宇田郷土史会の事例から -

For practice and future development in collaboration with local residents  
- From the case of the Uta Local History Society in Koka City, Shiga Prefecture -

佐野 正晴\*

Masaharu Sano

---

### abstract

In this paper, I will report on the practice I am working on in collaboration with the local residents, while being aware of Toshiro Ito's Theory of Community Museums and research trends in Public History. The purpose is to encourage self-reflection for future development by describing the activities I am working on with local residents using the method of auto-ethnography.

As a result, it turns out that such activities have a positive effect not only on local residents but also on curators of Community Museums like myself. However, there are a number of difficulties in continuing and disseminating such activities. In order to solve them, it is necessary to build an ideal model by collecting and analyzing advanced cases, and to create a necessary and sustainable mechanism to realize it.

### キーワード

地域博物館論・パブリック・ヒストリー・協働・仕組みづくり・宇田郷土史会

### 1: はじめに

伊藤寿朗（1991,1993 ほか）の地域博物館論は、彼の没後 30 年を迎える現在においても、その輝きを失っていない。しかし、その 30 年という歳月のなかで、博物館を取り巻く環境は大きく変化し、地域博物館の現場はさまざまな困難を抱えている。

本稿では、伊藤の地域博物館論と、近年日本でも進展が見られるパブリック・ヒストリーの研究動向（菅・北條 2019）を意識しつつ、筆者が地域の皆さんと協働で取り組んでいる実践について報告する。地域の皆さんの活動と、筆者のささやかな実践を広く紹介するとともに、困難な状況下での今後の展開を見据えた省察を目的とする。

実践を取り上げる本稿においては、筆者の立場性を明確にしておく必要がある（註<sup>1</sup>）。現在、筆者は滋賀県の甲賀市教育委員会に勤務し、文化財行政に携わっている。主な業務は、文化財全般（埋蔵文化財の発掘調査などを除く）に関することや、資料館の管理・運営、それらに関連する事務・調整などである。学芸業務に従うこともあるが、行政の仕事に多くの時間を割いている。学芸員の試験を受けて採用された専門職員ではあるが、一般的な学芸員像とは異なり、まさしく「行政の中の学芸員」（高田 2002）と言えよう。

\*甲賀市教育委員会事務局歴史文化財課

## 2: フィールドと宇田郷土史会の概要

滋賀県の東南部に位置する甲賀市は、平成 16（2004）年に水口・土山・甲賀・甲南・信楽の 5 町が合併して誕生した人口 90,197 人（2020 年 12 月 31 日現在）のまちである。全国的に知名度がある信楽焼や「甲賀流忍者」を始め、多くの文化財、歴史・文化遺産をその市域に有している。

本稿の舞台となる宇田は、水口町の中西部に位置する、206 世帯・498 人（2020 年 12 月 31 日現在）が居住する集落である。集落の中ほどには、当地を拠点とした武士である山中氏の屋敷跡が残されている。神社は集落の中心部にある八幡神社のほか、日枝神社や五十鈴神社が鎮座している。寺院は浄土宗唯称寺がある。山中氏の菩提寺の玉田寺を継ぐとされており（甲賀市史編さん委員会 2016）、境内に一族の墓碑がある。共有山林は集落の南側を流れる野洲川と杣川を渡ったところで、その入口付近に山の神の祭場がある。そこからさらに林道を奥へ進んでいくと、「名端の地藏」という仏の姿を彫った巨大な自然石が祀られている。

現在、筆者は有志の住民グループである宇田郷土史会の皆さんと共に地域の歴史の調査研究に取り組んでいる。メンバーの関心は多岐に渡り、個人での活動もさかんであるが、「大字宇田年寄講資料」の調査を会として取り組む課題の 1 つに位置付け、目録作成や翻刻などを進めている（写真 1）。



写真 1: 宇田郷土史会の皆さんと共に活動する筆者（左端）（提供：西川重義さん）

かつて宇田には年寄講という社会組織があり、地域の年中行事や共有山林の管理において重要な役割を果たしてきた。だが、時代の変化のなかで平成 23（2011）年に年寄講は「解消」され、あとには代々引き継がれてきた文書などが残された。私たちは「帖倉」（地域の文書蔵）に保管されていたこれらの資料を「大字宇田年寄講資料」と名付け調査を開始。これまでに昭和初期から平成の「解消」直前までを中心とした約 250 点の文書と、オコナイという民俗行事で使用された牛玉宝印などの祭具を確認した。

これらの資料からは年寄講や、それに関わる年中行事の変化を詳細に見て取ることができる。また、宇田にはこれ以外にも区有文書などの豊富な史料が残されており（水

口町役場総務課自治体史編纂準備室 2003)、行事やそれに関わる社会組織の変化を長期的な視点で詳細に明らかにすることができる。

残された資料が学術的に価値あるものというだけでなく、特筆すべきは、それらを活用して、地域の歴史・文化を知ろうとする動きが、住民にみられることである。地域住民が主体となって、自分たちが住む地域の歴史や文化の調査研究を行うことに対しては、生涯学習の推進や地域アイデンティティの醸成、地域文化財の保護など、さまざまな効果が期待できる。また、長年地域に住んできたからこそ資料から読み取ることができる情報もあるであろう。

このように宇田郷土史会の活動はさまざまな点で有意義なものであり、地域博物館論やパブリック・ヒストリーの議論を行う上でも適切な事例ということができる。

### 3：宇田郷土史会の活動と筆者の実践

ここでは「宇田郷土史会議事録」<sup>(註2)</sup>と筆者の手記に基づき、これまでの会の活動と筆者の実践について時系列で報告する。協働という観点から会と筆者との関わりを軸に整理を行う。なお、執筆にあたっては、自己省察を促すためにオートエスノグラフィの手法を採用する。

#### 1) 宇田郷土史会との出会い

平成 29 (2017) 年 10 月 21 日、宇田郷土史会の第 1 回会合が開かれ、会の名称と役員が決まったほか、歴史調査のテーマや進め方についての話し合いが行われた。このときあがったテーマには、山中家文書、佐渡の常心さん(山中家ゆかりの人物)、天保一揆、看護社、年寄講、油屋、紺屋などがあり、調査成果は冊子にまとめることが決まった。初発の段階から取り組みたいテーマや成果のまとめ方が具体的であったことがわかる。

また、このときには甲賀市教育委員会事務局歴史文化財課(以下、市歴文課)の「指導・協力」を得るために役員が依頼に行くことも決まった。これを受けて 12 月 13 日には、代表の西川治さん、副代表の山田喜一郎さん、庶務の西川重義さんが市役所に来られた。このとき筆者は後述する市歴文課の伊藤誠之さんとともにお話をうかがった。これが筆者の宇田郷土史会との出会いであった。

12 月 22 日の第 2 回会合では市歴文課訪問の報告が行われた。今後の活動の進め方について、市歴文課からのコメントとして、取り組みやすいテーマから始めると良いことや、調べたことを簡単なもので良いので整理してまとめ、それを積み重ねていった冊子を作ると良いことなどが紹介された。これを受けて会では調査内容の再検討が行われ、次回会合までに各自で宇田の年中行事を調べてくることから活動を始めることになった。

平成 30 (2018) 年 1 月中旬、筆者は別の業務で宇田の唯称寺を訪れた。その際に会のメンバーでもある、お寺の清水由子さんから、近いうちにお寺の会館で会合がもたれることを聞いた。会合ではお寺に所蔵されている史料を見するという。興味を惹かれた筆者は、会の活動にも関心をもっていたことから、代表の西川治さんに連絡をとり会合への参加の了承をいただいた。

1 月 28 日の第 3 回会合に筆者は初めて参加した。会合では、各自で調べた宇田の





写真 2:「帖倉」に入る

年中行事を集落全体や寺社、講などごとに一覧表に整理したプリントが配布された。その完成度の高さに驚いたのを覚えている。一覧表を確認しながらの話し合いのなかで、宇田の年中行事を語る上で欠かせない年寄講の存在がクローズアップされ、当面の会の活動として「帖倉」に保管されている「年寄講の箱」を調査することが決まった。

また、唯称寺所蔵の史料については、偶然にも筆者にそれについての知識があったことから、即席の解説会を行い、皆さんと楽しい時間を過ごすことができた。帰りがけには会の皆さんから今後の活動にも無理のない範囲で参加してほしいと依頼を受けた。このとき筆者は甲賀市で働き始めてようやく半年が過ぎた頃であり、勉強も兼ねて市内の特定地域で継続的な民俗調査を行いたいと考えていたところであった。また、当時から地域博物館論やパブリック・ヒストリーに関心があり、その議論に触れていたことから、「これはおもしろそうだ」という予感がし、依頼を引き受けてみることにした。

## 2)「大字宇田年寄講資料」の調査

3月4日の第4回会合は、「帖倉」がある宇田公民館で行われた。区長の立ち会いのもと、宇田郷土史会の皆さんとともに、年寄講に係る箱や紙袋を「帖倉」から持ち出し(写真2)、公民館の一室で広げてみた。木箱(A)、紙箱3個(B～D)、ダンボール箱(E)、紙袋(F)の合計6つのグループがあり、それぞれに丸括弧内に示したアルファベットで名前をつけ、中のものを確認しながら付箋を立てて仮番号付けを行った(写真3)。

作業中、会の皆さんは中のものを見ながら年寄講の話しをしてくださった。これ以降の活動でも作業中の談笑のなかで年寄講を始めとした宇田のさまざまな話を耳にした。筆者にとっては貴重な聞き取り調査の機会となったわけであるが、会の皆さんにとっても、年少者は知らない話もあるらしく、「地域住民による調査の場」「地域の歴史を語り継ぐ場」としても機能することが観察された。また、期せずして「話者」

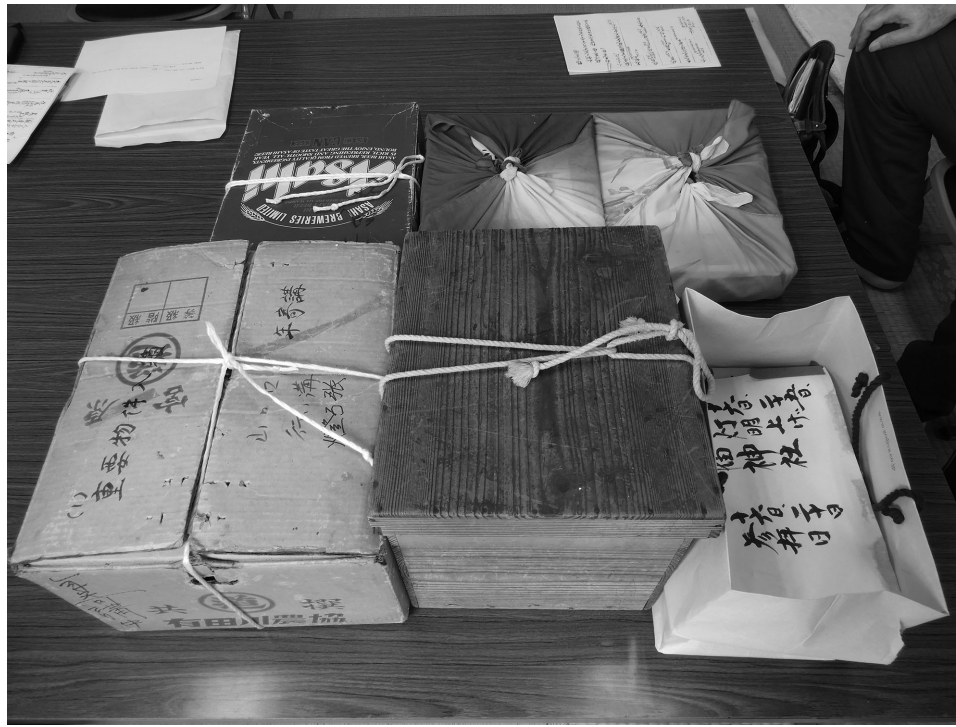


写真 3:「大字宇田年寄講資料」が入った箱や紙袋

となった年長者は、地域の歴史に強い関心をもつ会のメンバーや筆者に話すことを請われ、いきいきとした表情をされていた。

次回以降の会合では、木箱（A）に入っていた文書の目録作成を進めていくことになったが、筆者には文書調査の経験が乏しかったため、文献史学が専門の伊藤誠之さん（市歴文課）に助言を求めたところ、その方法などについていねいに教えてくれた。伊藤さんは長年に渡って甲賀市で働き、市史編さん事業にも携わった人である。「あくまでも文書目録は保存・管理のために作成します。ですので、（中略）必要以上に詳しくする必要はありません」（伊藤さんからのメールより抜粋）という言葉をもらい、多少の不安はあったが、あまり気負わずにとりあえずやってみようと思った。

4月22日の第5回会合には、伊藤さんの助言をもとに作成した「目録作成について」というプリントと、文書目録様式のエクセルデータを持参した。プリントを見ながら簡単な説明を行った後、早速作業に取りかかった。筆者が木箱（A）から文書を取り出し、枝番を記した付箋を立て、パソコンが得意な西川重義さんと橋本光興さん、小嶋一夫さんがその内容を目録に入力していく。その後、第6回（5月20日）、第7回（6月30日）、第8回（7月21日）にかけて木箱（A）の目録入力作業を行った。回を重ねるごとに作業スピードが上がり、途中からは文書に付箋を立てる作業も会のメンバーにお任せすることにした。

8月19日の第9回会合では、前回までに一通りの入力作業を終えた木箱（A）の目録について、内容の確認と整理方法の相談を行ったが、結論を出すことができず、後日筆者から伊藤さんに相談したところ、目録の年代順への並び替えや、内容による分類などの整理をしてくれた。必要な情報がしっかりと入力されており、文書目録として十分に活用できる完成度であるとのことで、伊藤さんは大変感心していた。10月7日の第10回会合では、整理済みの目録に沿って文書を並び替え、木箱（A）から中性紙箱への入れ替え作業を行った。作業後には次のグループの目録作成に着手し、その

日のうちに入力完了した。

この頃、筆者はある悩みを抱えていた。主体的かつ積極的に調査活動を展開されている宇田郷土史会の皆さんを頼もしく思いつつも、その反面、筆者自身が会の皆さんの求める水準での対応ができていないのではないかと感じ始めていたのである。そのことについて伊藤さんに相談し、特に文書の整理について現場での直接指導を依頼したところ快諾してくれた。

11月10日の第11回会合では、伊藤さんの指導のもと、文書の照合と整理を始めたが、作業内容が細かく複雑なため、大人数で取り組むことが難しく、手持ち無沙汰になる人が出始めた。この状況について、帰りの車中で伊藤さんと相談したところ、文書の確認作業はこちらで行い、会のメンバーには資料の活用を進めてもらってはどうかとの提案を受けた。

当時の筆者は、作業を進めるうちに、「完璧な文書目録」の作成と公開という方向性に気をとられすぎてしまい、当初の目的を見失っていた。文書目録は何らかの目的があって作成されるものであり、必要以上に詳しくなくてよい。「完璧な文書目録」を広く公開することも大事なことはあるが、ここでの第一の目的は、地域の人たちが目録によって検索可能な文書を活用して、地域の歴史にアクセスできることである。この文書目録はその水準に達しており、その意味ではすでに「完成」を見ていた。地域の人たちと協働で調査研究を行う際に、その目的や方向性について、より精緻に見きわめておくことの必要性を学んだできごとであった。

12月8日の第12回会合では、資料の内容調査を行うために目録を見て各自が関心をもった文書をピックアップした。このとき、西川重義さんが関心をもったのが後述する橋本光雄さんが記した一連の文章であった。

### 3) 筆者の調査活動と情報発信

ここで少し話は逸れるが、宇田郷土史会の協力を得ながら行った、筆者の調査活動などについても触れておきたい。

会の皆さんの精力的な活動に発破をかけられた筆者は、「今後の宇田郷土史会の調査研究活動に資する基礎資料を作成することを目的として」（佐野 2019a:243）、山の口の参与調査と現況報告を行った。山の口は毎年1月3日の早朝に共有山林で行われる山の神祭りであり、かつて年寄講が関わってきたもののうち、現在も行われている数少ない民俗行事の1つである。

筆者は平成30（2018）年12月30日の準備と、平成31（2019）年1月3日の行事当日に調査を行なったが、宇田郷土史会のメンバーが仲介してくれたおかげで円滑に進めることができた。また、報告の執筆にあたっては、草稿に目を通していただき、貴重なご意見をいただいた。完成した本を会の皆さんに渡したときに喜んでもらったことは筆者にとっても大きな喜びであった。筆者の調査成果は今後の活動のなかで活用される見通しである。

また、これとほぼ同じ時期には、市広報『こうか』（2019年1月1日号）の「甲賀の文化財」欄に「地域の歴史を、地域で調べる～宇田郷土史会による『年寄講』調査～」と題して、会の活動を紹介する記事を執筆した。結びに「みなさんがお住まいの地域でも、さまざまな歴史資料を紐解いてみてはいかがでしょうか」（佐野 2019b）と記したのは、宇田の紹介を通して同様の活動が市内に広がることを意図したためで



ある。後述するが、この頃から筆者は、宇田郷土史会のような活動のモデル化と、仕組みづくりの必要性を強く認識し始めていた。

#### 4) 調査成果としての冊子制作

平成 31（2019）年 2 月 16 日の第 14 回会合終了後、他の業務のため欠席した筆者に西川重義さんからメールが送られてきた。昨年の会合でピックアップした文書のうち、橋本光雄さんが記した「愛宕神社」の文章を翻刻し、会合で読み合わせを行ったという。その際に読めない字や意味がわからない言葉があり、メールはそれについての質問であった。

ここで橋本光雄さんと彼が書き残した一連の文章について簡単に説明しておこう。橋本さんは明治 43（1910）年、宇田に生まれた。陸軍士官学校を卒業後、陸軍第十六師団に入隊しアジア・太平洋戦争に従軍。復員後、昭和 22（1947）年～23（1948）年頃には中学校の代用教員として働いた。これとほぼ同じ時期には、戦中・戦後の混乱のなかで満足に教育を受けられなかった若者のために宇田で教育塾を立ち上げている。その後は村議会議員や町議会議員を約 10 年間にわたって務めた。昭和 62（1987）年に亡くなるが、晩年まで軽トラックに乗って宇田じゅうを走り回り、集落の人たちとお喋りをしていた姿が知られている。

その橋本さんによって執筆されたのが、宇田にある神社や、「名端の地蔵」についての一連の文章である。昭和 57（1982）年 2 月に「稻荷神社」「佐田彦神社」、同年 7 月に「愛宕神社」「金刀比羅宮」、同年 8 月に「名端地蔵尊」を執筆している。また、執筆年月日は不詳ながら、おそらく同時期に書かれたものとして「日吉神社と日枝神社三神」という題の文章も残されている（写真 4）。

達筆な文字がびっしりと並ぶ原稿用紙には、所どころに手書きの図表が挿入されている。また、コピーされて複数枚あるものもある。文章の基本構成は、取り上げる神社などを、自身の見聞などをもとに紹介しつつ、歴史や民俗に関する文献などを参考

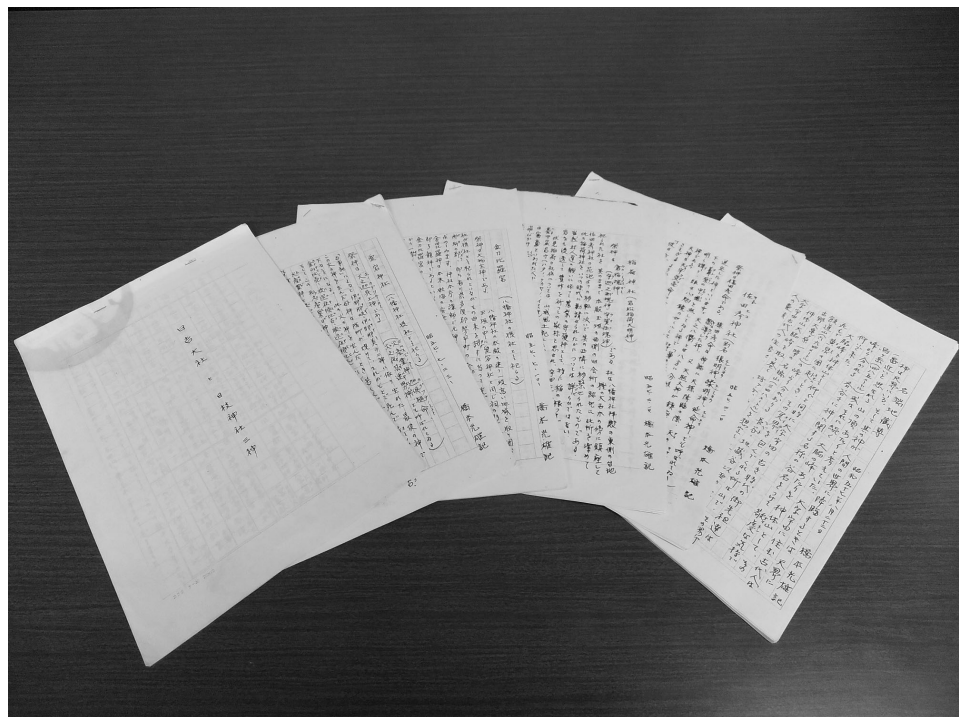


写真 4: 橋本光雄さんが書き残した原稿（提供：西川重義さん）

に解釈を加え説明している。そして、最後に歴史的な観点から当時（昭和 57 年）の宇田を見つめ直すことで、課題を指摘し、それについての意見を述べるというものになっている。

これらの文章が、どのような目的で書かれたのか、現段階ではわからないが、当時の宇田の人びとに対して訴えかけるような内容が多い。また、短期間に集中して執筆されている点も注目される。詳細な分析は稿を改めたいが、興味深いテキストである。

これ以降の会合では、他のさまざまな活動も続けながら、西川重義さんと小嶋一夫さんが自宅で翻刻してきた橋本さんの文章を全員で読み合わせ、内容の確認を行っていった。その場には筆者らも同席し、読みにくい文字の判読や、内容の解釈などのお手伝いをした。橋本さんの文章はもちろんであるが、そこから広がる宇田郷土史会のメンバーのお話が大変興味深く、地域についての理解を深めるのにも大いに参考になった。

作業を始めて 1 年が経過する頃になると、橋本さんの文章の翻刻には終わりが見え始めた。これを受けて、令和 2（2020）年 1 月 13 日の第 23 回会合と、2 月 23 日の第 24 回会合では、冊子制作の話し合いが行われ、伊藤さんの助言もあり、その仕様が決定した。ただ翻刻を掲載するのではなく、概要や注釈などを付けて、読者が理解しやすいものを目指すことになった。

こうして冊子制作に向けて本格的に動き始めた矢先、不測の事態が私たちを襲うことになった。新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大である。多くの社会・経済活動が制限されるなか、宇田郷土史会も 3 月 28 日の第 25 回会合（筆者は欠席）をもって一時休止状態となり、軌道に乗り始めていた活動が鈍化するかに思われた。

しかし、筆者の心配とは裏腹に会の活動が停滞することは全くなかったのである。その証拠に会合ができない期間にも、筆者のもとには会のメンバーから電話やメールなどで相談や質問がたびたび寄せられた。そればかりか、この間には小嶋徳男さんと田中憲司さんの 2 名が新たなメンバーとして加盟し、宇田郷土史会は総勢 8 名のグループとなったのである。

こうして 7 月 18 日には感染対策を行って第 26 回会合が唯称寺で開かれた。その席上で西川重義さんから半年前に決めた仕様をもとに編集した冊子の原稿が配布された。緊急事態宣言による外出制限で、どこにも出かけることができなくなったので、自宅で編集作業を進めたとのことである。すでにこの時点で冊子はほぼ完成していたが、より良いものにするためにと意見を求められたので、筆者からは、橋本光雄さんの略歴と、紹介されている神社の写真などを追加してはどうかと提案した。このうち略歴については、会のメンバーでもあり、橋本さんの子にあたる光興さんが担当することになった。

その後の会合で、細かな修正や発行部数などに関する協議が行われ、12 月中旬には入稿の運びとなった。印刷・製本はメンバーでもある田中憲司さんの会社に依頼し、費用は会のメンバーで出し合うことになった。年が明けた令和 3（2021）年 1 月 16 日の第 32 回会合では、西川重義さんから田中さんに初校が手渡され、2 月初旬に発行予定であることが報告された。

冊子は宇田の全戸に配布される予定である。地域の先人である橋本光雄さんが記した文章が、地域住民主体の活動である宇田郷土史会によって「発見」され、いまを生きる多くの地域の人たちの目に触れようとしている。



本稿で報告してきた一連の活動は、宇田郷土史会が、地域の過去と現在とをつなぐ媒介者となるまでの過程とも言えるであろう。冊子が配布された後、地域からどのような反応があるのか未知数ではあるが、橋本光雄さんや宇田郷土史会の皆さんがそうであったように、地域のことを普段とは少し違った視点から見つめ直す契機となることを期待したい。

この動きと並行して、宇田郷土史会では、「大字宇田年寄講資料」に含まれる、オコナイや山の口などといった民俗行事に関する文書の翻刻作業も進めており、これらが新たな成果物となる日もそう遠くはない。筆者はこうした活動に関わり、お手伝いすることのできる、基礎自治体の文化財専門職員 / 地域博物館の学芸員という仕事に大きな魅力と可能性を感じている。

#### 4：おわりに

ここまで宇田郷土史会と筆者の関わりを軸に、その活動と実践の一端を報告してきた。この協働による取り組みが、地域の皆さんだけでなく、筆者にも多くの学びと気づきをもたらし、有意義なものになっていることがわかるであろう。「VUCA の時代」<sup>(註3)</sup>と称される昨今、それは地域博物館や文化財行政の現場も例外ではない。そうした時代にあっては、「地域」<sup>(註4)</sup>という多声的な場において、新たな問いを立て、未来に向けて発していくことがこれまで以上に求められる。そういった意味でも筆者の個人的経験を超えて、こうした活動を広めていく必要があると考えている。

しかしその一方で、さまざまな理由から職員 1 人あたりの業務量は増加しており、そうした活動だけに多くの時間を費やすことは難しい。まして、この活動のあり方を広域で実践しようとするとき、それぞれの地域に半永久的に深く関与し続けるのは不可能である。

では、こうした活動を今後どのように継続し、また他の地域にも広げていくことができるのであろうか。その問いへの答えとして、宇田郷土史会を始めとした地域の活動のモデル化と、それに基づいた仕組みづくりを提案したい。地域における先進的な事例を蓄積し分析することで、理想的なモデルを構築し、それを実現するために必要かつ持続可能な仕組みをつくることが求められる。

本来であれば、ここでモデルを提示するべきであるが、筆者のアイディアは未熟であり、現段階では披露することができない。ただ、これまでの宇田郷土史会の皆さんとの活動のなかで、モデル化に向けたヒントを多数看取することができた。一部は本稿にも記したが、今後はそれらをさらに整理し、モデル化を進めていくことを当面の課題としたい。もちろん宇田郷土史会を始めとした地域の皆さんと活動をともにしながらである。

#### 【追記】

脱稿後の令和 3（2021）年 2 月、『大字宇田年寄講資料調査 I 橋本光雄著 八幡神社撰社小宮と日枝神社・名端地蔵尊』（A4 版 2 段組 46 ページ 巻頭カラー）と題された冊子が無事完成した（写真 5）。



写真 5：完成した冊子

#### 註

- 1: 本稿の内容は、筆者の立場性に大きく規定されてはいるが、あくまで個人の見解であり、所属機関を代表するものではないことをお断りしておく。
- 2: 会合ごとに西川重義さんによって作成される活動記録で、日時や参加者といった基本的な情報のほか、活動や協議の内容、次回の作業予定などが一定の形式で端的に記載されている。また、これは作成されるたびにメンバーや筆者らに共有されるもので、認識の齟齬などがあれば修正される。会の活動の継続性や安定性を支える上で重要な機能を果たしている。
- 3: VUCA は Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）の頭文字をとった造語である。もとは軍事用語として使われ始めたが、2016 年の世界経済フォーラム（ダボス会議）以降は、主にビジネス用語として使用されている。近年ではそれらに限らず、予測困難な社会や時代の状況を表す語として広く用いられるようになっている。
- 4: ここでいう「地域」は、単にある一定の空間や集団をさす語ではなく、それらを中核に構成されるネットワークのようなものを想定している。そこには相互に関係し合うさまざまな主体が含まれ、筆者のような基礎自治体の文化財専門職員 / 地域博物館の学芸員もその 1 つである。

#### 参考文献

- 伊藤寿朗 1991 『ひらけ、博物館』（岩波ブックレット NO.188）岩波書店  
 伊藤寿朗 1993 『市民のなかの博物館』吉川弘文館  
 甲賀市史編さん委員会 2016 『甲賀市史 第八巻 甲賀市事典』甲賀市  
 佐野正晴 2019a 「甲賀市水口町宇田の山の神祭り - 地域住民との協働による調査から -」  
 『淡海文化財論叢』第十一輯 淡海文化財論叢刊行会

佐野正晴 2019b「甲賀の文化財 地域の歴史を、地域で調べる～宇田郷土史会の『年寄講』調査～」『広報こうか』（2019 年 1 月 1 日号）甲賀市役所  
<http://www.city.koka.lg.jp/secure/20431/p22-23.pdf>  
（最終閲覧日:2021 年 1 月 21 日）  
菅豊・北條勝貴（編）2019『パブリック・ヒストリー入門 - 開かれた歴史学への挑戦』勉誠出版  
高田知樹 2002「行政の中の学芸員」『高円史学』18 高円史学会  
水口町役場総務課自治体史編纂準備室 2003『宇田区有文書調査報告書 滋賀県甲賀郡水口町宇田』

#### 謝辞

本稿の執筆にあたり、宇田郷土史会の皆さんと、甲賀市教育委員会事務局歴史文化財課の伊藤誠之さんには大変お世話になりました。ありがとうございました。

また、『九州保健福祉大学博物館学年報』第 10 号のご発刊、まことにおめでとうございませう。これからのますますのご発展を祈念いたしますとともに、執筆の機会を与えてくださったことに、末筆ながら深く感謝申し上げます。